

『湘南アカウミガメ物語』

宮戸みつる

《始めに》

『湘南の皆さん！ご無沙汰しておりました！』と、言わんばかりにアカウミガメが、30 数年ぶりに産卵・^{ふか}孵化をした。産卵は、2008年6月中旬、場所は引地川西岸・堀川網前辺り、個数は134個であった。



《産卵の背景》



神奈川県内では、1960年代から70年代にかけ、静かで人の少ない、石ころで覆われた酒匂川河口付近などで、産卵する事が多く報告されていたが、現在ではさっぱりの状態であった。その理由として、本来カメの産卵は孵化のしやすい砂浜で行われるようだが、昨今の環境の変化によって、産卵場所が変化したそうである。

ダム建設による土砂の流出量の減少や、波による砂浜の浸食、夜遅くまで砂浜を照らす照明、砂浜への人の出入りなど、産卵可能な砂浜がなくなったことがあげられる。もう一つの理由は、なんとといっても海や砂浜のごみの量である。今回産卵がなされたと言うことは、やっとカメにも認められるほど、湘南海岸がきれいになったという証である。

《漁師の知恵発揮》



今回孵化したのはアカウミガメで、通常ウミガメが孵化する場合、波打ち際からの距離と高さにおいて、その孵化率は大きく変わるそうである。

通常アカウミガメの平均孵化率は、数十%と言われている。

しかし今回は、90%以上の卵120個が孵化し、学者の方もびっくり仰天。実はこの孵化率の裏には、地元の漁師の知恵が隠されていた。

漁師の話では、カメが産卵した場所は、波打ち際に近く、大潮などの満潮時には波をかぶってしまい、卵が腐ったり、海に流されたりする可能性があるそうだ。

今回の産卵は、様々な環境の変化によって、本来持っている本能を鈍らせ、急ぎ・慌てさせたと考えられている。

その結果、波打ち際から程近い場所に産卵をしたそうである。

また野性の本能で、産卵した場所を天敵等から発見されないよう、産卵場所の周辺をくるくると歩き回るようだが、今回の場合は、砂浜の一部にしか跡が付いてない事に漁師が気づき発見された。



漁師が産卵した卵を慎重に掘り起こし、孵化しやすい環境、すなわち高台の砂浜へ移動させ、見守った事が孵化率を大きく増加させた、と学者は言っていた。



産卵から孵化までの約2ヶ月間、卵が暖まり過ぎたり、冷え過ぎたりしてはいけないそうだ。

一定した砂浜の温度が、生命誕生に最も重要であると言える。

《ついにカメ誕生！》

産卵から約2ヶ月程経った、8月13日の早朝のことであった。漁

師からの電話によって慌てて誕生の場に駆けつけ、カメラを構えた。小さな円な目をパッチリと開け、卵白のような透明状のものと砂が、小さな体いっばいに付着したまま、我先にと砂の中から現れる。孵化した子ガメの体長は、僅か4~5センチで手のひらに乗るサイズであった。



試しに手のひらに乗せてみると、元気いっばいに手足をばたつかせるのであった。生まれて間もないにもかかわらず、あれだけ歩ける様には只々感動した。甲羅は固く、その容姿は大人ガメと変わらない。

孵化した場所から一心不乱に海に向かって歩いている子ガメを、いたずら心で海と逆の方向に体を向けてみた。がしかし、生まれたばかりであっても本能なのか、海の方向がしっかりわかる様で、くると向きを変え、ひたすら海に向かうのであった。

カメの孵化は、一時に全ての卵が孵化するものと思っていたが、今回の孵化のように、数十個ずつ3日間掛けて行われることが通例のようである。

《いよいよ大海原へ》

どれほど歩いたのだろうか。長い道程をしっかりと歩き、いよいよ海に到着。この道程にも危険がいっばい。鳥などの餌になってしまうものや、ちょっと遅れて誕生したもの、走行が遅いものは、熱い砂浜で焼けてしまうのである。やっとの思いで大海原に到着だ。スムーズに迎え入れてくれると思いきや、殆どの子ガメが波に戻されてしま



まうのである。中にはひっくり返ってしまうものもあり、非常に危険な状態がひたすら続くのである。大自然とはこう言うものである。

仲間から遅れをとらないように起き上がり、一心不乱に海を目指すのであった。戻されても戻されても生きていく為、生まれたばかりの子ガメは、懸命に大海原に向かっていた。

《伝説ではなかった》

今回アカウミガメが孵化したが、同日、親ガメらしきカメが沖合いの網に引っかかったそうだ。

「親ガメは、子ガメが孵化をする時期になると、浅瀬に迎えにやってくる」と言う、伝説のような話があるようだが、伝説でない事が証明された。沖合いでの、親子の再会を願うものである。

《再会の日まで》



今回誕生したアカウミガメだが、ずっと日本近辺にいるのではなく、北米や中南米メキシコ辺りまで回遊しながら成長するそうだ。危険な世界旅行の始まりである。

我々の手で更に環境を良くし、今回孵化したこの子ガメ達が30年後、親ガメとして湘南の海に戻り、次の世代を誕生させる事を願うばかりである。何はともあれ、多くの子ガメが孵化し、一生懸命海

に向かって歩く様には、私も感動すると共に元気をもらった。子ガメたちよ！また会う日まで！！

写真撮影も筆者（宮戸みつる）